

『20世紀の管弦楽曲 –新たな音色の追究』

伊藤美由紀

後期ロマン派以降、管弦楽編成は拡大し、4管編成以上、打楽器や編入楽器も多数導入するなど、色彩豊かな音響による作品が増えた。そして19世紀末から20世紀に入り調性の限界に到り、作曲家が調性というシステムの枠のなかで個性を発揮しようと独自の音響を模索した時代が終わる。調性の崩壊、新たな作曲家独自の音楽語法の探求の時代に入っていく。それまでにない音色を探し個性的な音響的作品の創造を試みた7名の異なった環境、文化、国で活躍した作曲家に焦点をあて、彼らの7作品を作品完成年代順に追っていきたい。

最初に、12音技法のシステムを確立したオーストリア人作曲家の1人、シェーンベルク(1874-1951)の調性から離脱し無調の様々な可能性を試みていた時期の作品のひとつ《5つの管弦楽曲》(1909)をあげたい。特に3曲目『色彩』では、異なった楽器を通して微妙な音色の変化を生み出し、彼の「和声学」のなかで記述されている“音色旋律”を試みている。

ストラヴィンスキー(ロシア、1882-1971)の3大バレエ作品のなかの5管編成による大作《春の祭典》(1913)は、調性の響きを残しながら、複調的な扱いや半音階的音形による不協和音、そして、変拍子、不規則な鋭いアクセントによる強烈なリズム、金管楽器の鮮やかな響きと、多彩な打楽器の効果的な使用により構築されている。後の作曲家達に大きな影響力を与えた傑作である。『音楽は何も表現しない』と彼は言う。音とリズムで多様性を追究し、無駄のない構成で音楽に自律性をもたせた。

メシアン(フランス、1908-92)は、パリ国立高等音楽院の作曲科の教授を務め、その弟子たちは、次の時代にかけて国際的に活躍している。次に紹介するクセナキスも彼の弟子の1人である。インド、ギリシャ、鳥の鳴き声などからリズム、音色を探求し、独自の音楽語法を築いて作品にいかしている。彼の代表作のひとつでもあり、同時代に発明された電気楽器で独特の音色操作の可能なオンド・マルトノを使った《トゥランガリーラ交響曲》(1949)をあげる。彼にとって音楽はつねに色彩であり、リズムでさえ色合いを感じていた。全10楽章では、彼の主要な音楽語法の要素が散りばめられている。

次に、クセナキス(ギリシャ、1922-2001)の初期の重要な作品《メタスタシス》(1953-54)を紹介する。数学者、建築家でもある彼は、その知識を音楽作品のな

かにも応用し、複雑な数学の計算により作品は構築されている。弦楽器のグリッサンドの各々の傾きも計算され組織的に使用されている。その音色は、繊細であったり暴力的で攻撃的な轟音であったり、彼の経験した戦渦の緊張感を表現しているような音響である。

ミュライユを始めスペクトル楽派の作曲家達が音響的に影響を受けたりゲティ(ハンガリー、1923-2006)の、映画「2001年宇宙の旅」のなかで楽曲の一部が使用されたこともあり彼の名前を広めた作品《アトモスフェール》(1961)を見てみよう。彼が名付けた“マイクロポリフォニー”という密度の高い音構造で構築されている。トーンクラスターと似ているが、静的なラインよりも動的に使用されるという点で異なっていると彼は述べる。全ての楽器がディヴィジで各々の音を演奏し、管弦楽器ともに素早く動くヴィブラート、ミュートの使用、特に弦楽器においては、スル・タスト、スル・ポンティチェロ、コル・レーニョ、ハーモニクス・グリッサンドなど様々な奏法でテクスチャーごとに微妙に音色を変えていく。ピアノは打楽器的な扱いをし、弦の上をワイヤブラシなどで触れ効果的な音色を加えている。

シェルシ(イタリア、1905-88)も、スペクトル楽派の作曲家達にその個性的な音響で影響を多大に与えた。《Konx-Om-Pax》(1968-69)では、フルートは使われず、最後の第3部のみ合唱が使用される。タイトルは『平和』を意味し、そのサブタイトルとして『音の3つの局面：不変なものの最初の動きとして、創造的な力として、仏典からの音節「Om」として』と書かれている。異なった音域、種々な楽器を活用し、1つのピッチのまわりの音で作品を構成する。管弦楽法の洗練された音色、微分音や楽器の特別奏法の使用などにより、1つのピッチが複雑な音色で変容され1つの作品として昇華されていく。また、全く沈黙はなく、絶えず変容している1つのピッチ(3部構成のなかで中心音は各々C-F-Aを使用)を通して宇宙的な音響空間を築いている。声の使用は彼の作品のなかで重要な意味をもち、楽器と同様な扱いをして複雑な音色を醸し出している。

最後に日本人作曲家、武満徹(1930-96)の《ノヴェンバー・ステップス》(1967)をあげる。当時、異質な伝統のなかで育まれた邦楽器の薩摩琵琶、尺八と西洋楽器のオーケストラを同時に使用したという点で異例であった。邦楽器の楽器の特性から生じる不確定性の要素を含んだアイデアが、出来る限り長く1弓で、出来る限り長く1息でと西洋楽器にも応用され、邦楽器で大切なタイミングで

ある“間”もうまく配慮されている。邦楽器のカデンツァ部分は、図形楽譜で記譜されており、奏者に自由が与えられているが、音の出し方、奏法、イントネーションなどが詳細に数字、図形で記述されている。邦楽器を中心にその後方に西洋楽器は左右対称に舞台に配置され、2台のハープを邦楽器の後ろに配置するなど、空間的な音響の扱いも効果的にされている。

機能と和声が確立された古典派時代から続いた調性という理論は、20世紀に調性のない音楽＝無調の概念に到達した。無調音楽では、各々の作曲家に音をいかに扱うかが委ねられる。そのため、予期しない音色の発見、音楽の展開に出会うことが可能である。慣れない響きのせいで調性音楽のように予測できる音楽ではない。聴き手は、新たな音色との出会いに緊張しながら耳を傾けるといふ音楽の聴き方が必要となってくるであろう。



(参考 CD)

1. CD ソニークラシカル/SRCR-2717: シェーンベルク、ピエール・ブーレーズ (指揮)
2. CD ソニークラシカル/SICC-1083: ストラヴィンスキー、ピエール・ブーレーズ (指揮)
3. CD EMI クラシックス/TOCE-14157: メシアン、サイモン・ラトル (指揮)、トリスタン・ミュライユ (オンド・マルトノ)
4. CD Le Chant du Monde (輸入版) /LDC278368: クセナキス
5. CD ワーナークラシックス (輸入版) /2564-69673-5: Ligeti Project 5CDs
6. CD Accord (輸入版): Scelsi, Oeuvres Pour Orchestre 3CDs
7. CD BMG メディアジャパン/BVCC-37283: 武満徹、小沢征爾 (指揮)、鶴田錦史 (薩摩琵琶)、横山勝也 (尺八)